

カフカの『判決』
—物語の構造とその解体—

服 部 裕

“Das Urteil” von Franz Kafka
—Die Struktur der Geschichte und ihre Dekonstruktion—

Hiroshi HATTORI

Zusammenfassung:

Kafkas Text bzw. dessen Motive und Ausdrücke sind vieldeutig. Jede Deutung des Textes scheint also recht zu haben, gleichzeitig trifft sie aber daneben. Hier erkennen wir, daß unser Versuch, seinen Text nur semantisch auszulegen, im wesentlichen vergeblich ist. In der vorliegenden Arbeit wird daher versucht, den Text “Das Urteil” vorwiegend hinsichtlich dessen Struktur zu analysieren.

Wie in anderen Texten von Kafka wird auch in “Das Urteil” die Problematik der Weltstruktur im Schema der Ödipus-Beziehung gezeigt. Wir sollen aber mit dem Text vorsichtig umgehen, um nicht in die semantische Falle wie z. B. den existenziellen Dualismus—Vater als omnipotente Macht einerseits und Sohn als davon entfremdeter Unterdrückter andererseits—zu geraten. Der Text fixiert nicht eine Struktur, sondern tendiert dazu, jede Struktur, die bereits besteht, sowie nun aufgebaut werden will, in Frage zu stellen bzw. zu relativieren.

Zu diesem Mechanismus ist der in Rußland lebende Freund, der in Wirklichkeit gar nicht existiert, sondern nur von Georg erfunden wurde, eine Schlüsselfigur und bekommt grundlegende Bedeutung. Die fiktive Realität des Textes setzt einzig die irrealer Existenz voraus, so daß die ganze Geschichte keine Gültigkeit gewinnen kann. Es handelt sich um eine Geschichte, in der nichts geschieht, oder die irgendwelche Geschehnisse herbeiführt, aber sie gleichzeitig ungültig macht, also um eine Anti-Geschichte.

In dieser Anti-Geschichte läßt Georg den Freund zunächst in seinem eigenen Interesse als “Anderen” funktionieren, der zu der Gemeinschaft der Einheitlichkeit, in der sein Vater, er und alle anderen zu leben haben, nicht gehören will, um eben diese zu relativieren. Dennoch ist der Freund als “Anderer” im Saussureschen Sinn von der “Parole” Georgs abhängig, der selbst vom System der “Langue” gefangen ist, denn er funktioniert als sein fiktiver Doppelgänger. Hier müssen wir die paradoxe Beziehung zwischen “Parole” und “Langue” ins Auge fassen, d. h., daß “Parole” einerseits ohne “Langue” als ihre Voraussetzung nicht funktionieren kann, daß “Langue” aber andererseits ohne “Parole” nicht möglich ist. Diese paradoxe Beziehung kann auch auf diejenige zwischen Georg und dem Vater übertragen werden. Georgs Versuch, der Machtstruktur des Vaters (“Langue”) zu widerstehen, um das eigene Subjekt (“Parole”) aufrechtzuerhalten, führt nur zu dessen Verneinung. Der Freund ist

also trotz der Intention zum “absoluten Anderen” nur der “relative Andere”, wie auch die Struktur des Vaters nicht absolut ist.

Was für eine Geschichte erzählt dann überhaupt dieser Text? Er erzählt gar keine Geschichte, sondern bricht nur jede Geschichte (auch die eigene) ab. Der Text verhindert allein die Fixierung jeder Bedeutung, die für die Entstehung einer Geschichte und damit den Mythos des immanenten Wertes die Voraussetzung ist, indem er ein geschlossenes Ende immer weiter verschiebt (Wir wissen eigentlich nicht, was mit dem fallenden Georg wird). Denn es gibt keine Geschichte, der keine Intention zur Stabilität der Struktur innewohnt. In dieser Hinsicht kann der Text von Kafka eben als dekonstruktiver Versuch jeder Struktur gelesen werden.

カフカのテキストを前にして、解読不能の作者の物語世界がそこにひろがっていると思っはならない。また逆に、解読することは容易でないが可能であると思うことも、同様に間違いであろう。何故なら、カフカのテキストには、本来解読すべき物語などどこにも見当たらない、と思われるからである。解読されるのは、共通言語の上に構築された物語である。カフカのテキストには、そうした意味での物語は読みえない。共通の言語を疑わせしめるところにこそ、カフカのテキストの価値はあるのである。そこにはバルトが言うところの「解きほぐすべき」⁽¹⁾ 多元的な構造世界が、象徴としてでも比喩としてでもなく、ただ書き記されたものそのものとして横たわっているだけである。われわれ読者に許されている一呑むしろ読者にしか可能でないと言うべきかも知れないのは、テキストの中に作者カフカの内面世界の象徴表現やアレゴリーを解読することではなく（まして内面の孤独性であるとか、罪性であるとかいったものは論外である）、カフカという「書き手」⁽²⁾ によって構築された構造世界を、丹念に解体していくことだけである。そしてその解体作業の終着点に至るなかで、現前のテキスト以前に予め一個の主体としての作者カフカを措定すべきではない。われわれ読者にできることは、謂わば意味作用という玉ネギの皮剥きでしかない。剥き終わった後に一皮は無数にあるように思われ、皮剥きがいつか終わるとは思えないのだが—残る実体（シニフィエ）は何もなく、一枚一枚の皮を剥く過程にのみ価値と悦びは見いださるのである。

実体とは空虚であり、共通言語による物語に支えられた権力である。そして、カフカのテキストが虚構をもって、その実体と闘っているということに異論はないはずである。とは言えカフカのテキストに、抑圧的でしかありえない権力（例えば「父」）を否定する、新たなる権力（例えば「息子」）の構築はまったく読みえないと断言できるだろうか。テキストの言説に内在し、それ自体が常にさらされている危険性はまさにここに隠されている。つまり、「たとえ権力の外にある場所から語ったとしても、およそ言説には、権力（支配欲 *libido dominandi*）がひそんでいるのである」⁽³⁾。こうした批判的視座からテキストを読むことは、カフカの場合のみならず重要である。

以下、『判決』のテキストに織りこまれていた可能性を、作者自身が読者に向けて仕掛けていた幻惑に惑わされることなく、またテキストに対する作者自身の意図および理解と距離を置いたところで読んでみたい。何故なら、テキストの豊かさは、「そこにおいて『まだ思惟されていないもの』を到来させるところ」にあり、作者が「意識的に支配している体系そのものにおいて、なにか彼が『支配していない』体系をもつことにある」からだ⁽⁴⁾。さもなくば、テキストは自らを再権力化するだけにすぎず、読者もまた、その権力に自らの存在基盤を託すことにしかならない。アドルノの言葉を借りれば、「芸術家は、自らの作品を理解する義務を負ってはいない」のである⁽⁵⁾。

『判決』は、カフカのテキストの中であって、一見なんの変哲もないオイディプスの物語であるかのような印象を与える。しかし、このテキストを、抑圧的な父の権力と息子ゲオルクの罪性という

単純なオイディプス的關係に還元することはできない。つまり、ゲオルクの父に対する前意識的な罪悪感（母のことや、店の権限を奪おうとしていることや、無断で婚約したこと等々）が、息子をオイディプスの罪に向かわせ、結局死を宣告されるという解釈ほど、陣腐かつ不毛な読み方はないのである。

カフカは、1913年2月11日付けの日記の中で、自ら直接『判決』についての解釈を書き記しているが、これはこの多重に折りこまれたテキストの構造を解くポジティブな証言とはいえない。しかし、そこに作者の負の意図を見とすれば、この日記の記述は、重要な手掛かりとなる。カフカは、このテキストの中でもっとも基本的かつ重要であるオイディプスの三角形の關係項としてのロシアに移住した友人を、当然のことながら—もちろんカフカは、このテキストがオイディプス的關係を基軸にしていることを意識している—息子ゲオルクと父をつなぐ共通項であると言明するが、結局はその共通項も父という権力を支える要素であり、ゲオルクにとっては疎遠のものであるとほのめかしている：「共有のものはすべて父の周りに積み上げられ、ゲオルクはそれをただよそよそしいもの [……] としか感じられない。」

カフカは、ことさらに父の力を絶対的なもののように強調し、それによって息子を単なる被抑圧者扱いすることで、すべてをオイディプス的な父の力に収斂させようとしているのである。絶対的な力をもつ父と、内なる罪（父を倒し父にとって代わりたいという欲求）に苦悩する被抑圧的な息子？ このテキストは、本当にそんなつまらない読み方しかできないのだろうか。であるとすれば、カフカの文学そのものが疑われなくてはならなくなってしまう。

そんなことは決してないと、とりあえず断言しておこう。カフカのテキストは、まったく違った読み方が可能である。

『判決』におけるオイディプス的關係は倒錯している。それはまず、各關係項が、決して恒常不変の位置關係を形成していないこと、さらに被抑圧的であり、それによって「罪」を運命づけられた息子が、父の権力の無実性を、頼まれもしないのに自ら立証しようとする転倒に認められる。取り沙汰されてもない父の「罪」の無実性を訴えることで、息子は逆説的に父の「罪性」を想定しているのである。父に死刑宣告を受けたゲオルクは、父から身を守ろうとも、父を否認しようともしない：「なつかしいお父さん、お母さん、でもぼくはほんとうにいつもあなたがたを愛していたのです。」(Liebe Eltern, ich habe euch doch immer geliebt.) (68) この言葉は、ゲオルクの自責から発せられたような印象を与えるが、むしろ父の無実性をパラドキシカルに強調したものと読むべきである⁽⁶⁾。

さらに各關係項の不確定さは、そのような倒錯したオイディプス的關係の構造をも、つまりテキスト自身がたったいま構築したばかりの構造をも、疑わしい状態に置く、つまり体系そのものを揺さぶってしまうことになる。「[カフカの散文] は表現によって表現されるのではなく、表現を拒絶すること、つまり解体すること (Abbrechen) によって表現される」⁽⁷⁾ というアドルノの指摘も、こうしたコンテキストで理解されるべきである。重要なのは、関係の中で形成される年老いた父と息子ゲオルクの心理的葛藤とか、ヒエラルキー的な力関係といった、一定の場所に成立する「意味されたもの」として確定した物語ではなく、そうした物語を不可能にしてしまうような「物語の引き延ばし」⁽⁸⁾ を可能にする、示差的な關係項 (シニフィアン) 間に生じる価値の相対性である。再度バルトの言葉を借りれば、「作品の特殊性は作品が包み隠している意味されるものに属すのではなく [……], ただ意味作用の形式によるものだ」ということになる⁽⁹⁾。

『判決』のテキストにオイディプス的な構造を与えているのは、父、息子それにロシアに移住した友達という關係項である。このテキストに記された「出来事」は、常にこのロシアの友人を回転軸として循環している。つまり、この友人なしには、テキストの「物語」構造は維持できない。にも

かかわらずこの友人は、決して物語的事実として実在してはいない。ゲオルク自身によって捏造された非-実在だけが、テキストの虚構的事実(物語)の唯一の裏付けたらうとしているのである。(ゲオルクのみならず、父親の言動もすべてこの非-実在以外のものは前提としていない。)まずはこの意味で—更なる論拠は後述するとして—『判決』において語られる出来事は、その出発から空疎であり、何かを表現するためでなく、むしろ「物語」の主体(そして二重の意味で作者)の本来の出来事に見せかけの運動を与えるためのものでしかない(ゲオルクもカフカも本当は結婚などしたくないのだし、ゲオルクの見せかけの罪悪感の背後で、カフカ自身は不敵に微笑んでいるのである)。またそれは、虚構的事実を持たない、つまり何も生起することがない、いつでも無効にできる出来事、謂わば非-出来事ではない。

ロシアの友人というこの回転軸は、その非-実在性が故に不安定である。謂わば回転軸の「ぶれ」が、このテキストの非-出来事性の構造を支え、と同時に、すでに上でも触れたように、その構造自体を揺さぶる原因にもなっている。父とゲオルクの見せかけのオイディプス的關係の裏に、実は倒錯したオイディプス的關係が見え隠れするのも、このぶれの振幅の範囲内である。カフカ自身、ロシアの友達にこのような機能が潜在する可能性を認めている:『『判決』を説明することはできません。いつか、これについての日記の箇所を、君に見せるかもしれません。この物語には、それと認められない形で、抽象が満ちています。友人はほとんど現実の人物でなくて、むしろ父とゲオルクに共通するものかもしれません。物語は父と息子の周りを巡回するものかもしれず、友達の変化する姿は、父と息子の關係の遠近法的变化かもしれません。しかしそれについて、ぼくは確信しているわけでもありません。』⁽¹⁰⁾

「確信がない」というカフカの言葉は示唆的である。もちろんこの言葉は、額面どおりに受け取れない。神経症的(オイディプス的)な不安が感じられると同時に、むしろ分裂症的(エロスの)な笑いを噛み殺しているカフカの姿が見え隠れする⁽¹¹⁾。

作者カフカの場合はさておき—カフカの不安は、虚構としての不安と理解すべきであろう⁽¹²⁾—、ゲオルクの「不安」は何なのだろうか。この問いに答えるために、意味論的な別の問いをたててみよう。つまり、ロシアの友達とはいったい何を意味しているのだろうか。そして何故ゲオルクは、呼ばれもしないのに、父親の部屋に入っていたのだろうか、という問いである。

ゲオルクがロシアの友達に手紙を書いている時点では、「友達」はまだ、父と息子の「共通のもの」とはいえない。これは当初明らかにゲオルクによって仕立てられた一方的な共通項である。ペテルスブルクへの手紙の話を聞いたとき、それが誰宛てなのかということ、父は知らない:『『ペテルスブルクにだって?』と父はたずねた。』(《Nach Petersburg?》fragte der Vater.) (59)そしてそれがロシアの友達のことだと知らされると、父親はすぐに警戒の色を示す:「ああ、おまえのあの友達にだね」と父は一語一語強調して言った。』(《Ja, Deinem Freund》, sagte der Vater mit Betonung.) (59)警戒はすぐに否定に変わる:「おまえはこの件でわしと相談しようと、ここへやってきた。[……]わたしは、ここに属していないことにかかずらいたくない。』(Du bist wegen dieser Sache zu mir gekommen, um dich mit mir zu beraten. [……] Ich will nicht Dinge aufrühren, die nicht hierher gehören.) (60)「ペテルスブルクの友達なんて、おまえにはありはしないんだ。』(Du hast keinen Freund in Petersburg.) (61)

実際に「友達」がいるのかいないかということ問うことは、さして重要なことではない。われわれが着目しなければならないのは、「友達」の存在が嘘であれ本当であれ、とにかくゲオルク自身がそれを必要としているということである。では何のために?ここでわれわれは、意味論的な畏の前に立たされることになる。自らの意志で婚約し、店の実権も確保することによって、抑圧的な父の力からのがれ、自立した自己のアイデンティティと自由とを確立するために、父に対する正当化

と蜂起の口実としての「友達」が必要だった、という疎外論的解釈はこのテキストに内在する可能性を無効にしてしまう。

このテキストがわれわれに示しているものは、一つの具体的なオイディプスの三角形—それがたとえ典型だとしても—ではなく、オイディプ的に投射された世界の構造そのものである。(この意味でこそ、「この物語には、それと認められない形で、抽象が満ちています」というカフカ自身の暗示的な言葉も理解されるべきである。) 構造のなかにとどまったまま、このオイディプスの関係を克服するためではなく、この絶対的と思われる構造—あるいは体系と言ってもよいだろう—自体を解体する、つまり相対化するために、ゲオルクによって虚構されたのが「友達」である。しかしそれは、テキストのうわべの運動上にいるゲオルクが、この様な目的を意識化しているということの意味しているのではない。うわべのゲオルクに顕在するのは、あくまで神経症的な不安である。嘘を見抜かれる不安、待ち伏せされる不安:「それじゃ、お父さんはぼくを待ち伏せしていたのですね!」(Du hast mir also aufgelauert!) (67)

テキストをしかしこれ以上意味論的に読むことは控えよう。むしろ、それがいかに機能しているかを解くことが重要なのであるから。

「友達」がゲオルクの分身であることは確かであろうが、やはりその意味が問題なのではなく、それがいかに機能しているかをたずねなくてはならない。「友達」に関してもっとも重要な認識は、父自身がいみじくも言い当てているように、彼が「外」にいるもの、「ここに属していないもの」(Dinge [……], die nicht hierher gehören.) (60) であるということである。彼が存在する「異郷」とは、単に空間的な距離を表意するのではなく、共通言語によって支えられ、またその前提である共同体的均質性⁽⁹³⁾の境界線の外を想定しているのである。

「友達」は「他者」である。それも均質性を前提とした、体系内における相対的な差異としての他者ではなく、あくまでも体系の外に身を置き、体系内のいかなる言語によってもイメージしえない、謂わば絶対的な差異としての他者⁽⁹⁴⁾であろうとする。あるいはそうした他者の可能態と言うべきかもしれない。ゲオルクはこの他者としての「友達」を指定することによって、父が所属する体系の相対化に、それが無意識であるにせよ向かって行くのである。

しかし体系のなかにとどまるかぎり、息子は、父が属し、その代理人として機能している権力構造に脅かされ続けなければならない。また権力の代理人あるいは窓口としての父—父が権力そのものを体現しているとは思われない。カフカの作品に現われる父は、年をとり、現役を退き、ほとんどいつも頭をうなだれさえしている、自分自身抑圧された存在である⁽⁹⁵⁾。その父は、もちろん自らの力の相対性を感じているし、それを暴こうとする諸々の非難や攻撃に対しては大きな脅威と不安を抱いている。だから父は、何とか自らの相対的な絶対性(権力、権威、固定された意味)、つまり見せかけの「絶対的」価値(内在的価値の幻想)を保持するために、示差的な関係項である息子を、体系の均質性(相対的な差異性)のなかに縛りつけようとするのである。

縛りつけるとは、しかし排除を意味するのではない。排除とは決断であり、その判断を突きつけることである。それはつまり、不可視的な権力構造の連続性がある一点で分岐、分断されることによって、自らをごくわずかな部分にせよ可視的なものとして出現させることを意味する。言葉を換えれば、それはカフカ文学のキーワードとしてしばしば問題にされる「法(掟)」の「実践的言表」⁽⁹⁶⁾である。そして法は、ドゥルーズが指摘しているように、決して超越的なものではなく、「常に、かたわらの事務室、ドアのうしろ側、無限のなかに」あり、「言表、言表行為が、言表する者の内在する力の名において法を作るのである。」⁽⁹⁷⁾ この意味でゲオルクは、手紙による言表行為を通して、「友達」という「法」を父に突きつけ、父はその「法」の流れを息子の方に押し戻すのである。しかしカフカのテキストに現われる法あるいは権力の無気味さは、むしろ判決を下さないまま、い

つまでも「訴訟」を引き延ばす、つまり被告をそこに縛り続けることにある。その意味で父が息子に判決を下すことは、自分が依拠する不可視的な力を限定し、被告を自らの支配下から逃すことにもなるのではないだろうか。こうしたコンテキストで読めば、ゲオルクの望みは思わぬ形で果たされたことになる。橋からのダイビング—もちろん自らの意思によるダイビング—はひょっとしたら「外の」世界へ通じる出口へ、ゲオルクを導いていくのかもしれない。これは明らかに、読みの一つの可能性である。

しかし『判決』のテキストの結末は、本当にそのように完結された構造として、読みうるものだろうか。われわれはもう一度、ゲオルクが仕掛けた「他者」に内在する問題性と可能性を検証する道を迂回して、ここに戻ってこなければならぬ。

他者としての「友達」が、あくまで体系(ラング)の中に捕われたゲオルクという主体の代理人(分身)として機能していると考えれば、ソシユールの言語学的な意味で、「友達」は、個人としてのゲオルクがそこでは主役たりうるパロル⁽¹⁸⁾に支えられたシニフィアンであると言える。ここで確認しておかなくてはならないのは、ラングとパロルとの「弁証法的」関係に認められるパラドックスである。つまりひとつの特定集団の枠内に限定されるラングを前提とすることなしには、パロルは運用されず、それにもかかわらず、ラングはそのパロルから出発しなければ可能にならない、という原初的なパラドックスである⁽¹⁹⁾。とすれば、ゲオルクの発話行為は、父が属する体系を相対化する潜在的意図から出発したとしても、自らが逆説的に前提としている体系の枠から、本質的には脱出しえないことになる。さらに言えば、パロル(主体)が自らの前提であるラング(制度)からその権威を奪うということは、自らの実在の不可能性を求めることを意味する。われわれはここで再び、あの虚構の事実を持たない「物語」の非-出来事性のからくりを遭う。つまり「物語」がひたすら語るのは、空疎な非-実在に支えられた無効な出来事のみならず、それを語る(ならびに語られる)主体自体の不可能性であり、主体が不在の、謂わば「何も起こらない出来事」つまりそれが呼び出す非-物語である。:「この出来事とは一種の非-出来事、何も起こらない出来事、準-出来事であり、それは物語を呼び出すと同時に無効にするものだ。」⁽²⁰⁾ 主体が主体であろうとするために抑圧的な権力の「物語」に対し自らの言説をもって抗えば抗うほど、主体は自らの実在の前提を否定することになり、つまりは自分の「物語」の不在性(主体の不可能性)を証明することになる。

一方パロルがラングの出発点であり、常にラングを変化させる可能性を内包しているというもう一つの原理を考えると、体系外に捏造された「友達」も、仮にそれが現前の体系をそのまま受容するのではないにしても、結局はラングによるイメージ化を通して新たなシニフィエを確立することにしかならない。つまり、「他者」を措定してみたところで、それがパロルによるものであれば、それは相対的な「他者」であり、均質性に支えられた相対的差異を越えられないのである。

ゲオルクに認められる神経症的な不安は、このようにパラドキシカルな言語構造にその淵源を探ることができるであろう。手紙という一方通行の媒介によって仕掛けた虚構が、—それが共通の言語体系の内側で創造されているかぎり—いつか実体(法)として自分の方向に逆流してくるのではないかという不安⁽²¹⁾が、ゲオルクをむしろ父の部屋にせきたてるのである。そしてその不安は、見事に的中してしまう。父は実在しないはずの「友達」を自分達の言語でままとイメージ化してしまい(63 ff)、共同体の言語に新たなシニフィアンを書き込んでしまったのである。

ではそれは、構造内の見せかけの絶対性が完全に勝利したことを意味しているのだろうか。テキストの見せかけの「物語」は、確かにそれを語っているように見える。しかしそれによって、このテキストの限界を、息子ゲオルクの再オイディプス化の中に認めてしまうことはできないであろう。上で見たラングとパロルのパラドキシカルな相互関係を、もう一度想起してみよう。パロルがラングを前提とし、ラングがそのパロル自体の帰結であるなら、それはパロルのラングへの依拠と

同時に、ラングのパロルなしでの不可能性をも示している。つまりラングはそれ自体パロルとの関係の中で、少しも絶対的などではないということである。また特定集団内に確立されたラングの構造は、恣意的な記号に支えられた示差的な諸関係の体系から成る。そしてその示差的関係は、単に語と概念という表意にのみ関わるのではなく、ものの価値が他の諸価値との関係の中だけでしか規定されえないという、示差的な価値形態論をこそ意味している。つまり諸価値に、絶対性は少しも内在していないのである。そうした構造的な相対性の中でどんなに自己の絶対性を主張したところで、いかなる主体もその相対性を超克することはできない。

しかしこのような相対性を指摘するだけでは、いかに相対的とは言え、現にある構造内における抑圧的な諸関係を解体することにはならない。何故ならそれは、相対的な差異の上に成る構造を、ただ確認するだけに過ぎないからだ。

再びテキストの結末の箇所に戻ることにして。ゲオルクの橋からのダイヴィングが、「出口」への飛翔を含意しているのかもしれない、ということはずでに上で述べた。その通りかもしれないし、違うかもしれない。いずれにしても、様々な意味論的解釈は可能であろう。しかしここに至って、われわれの考察を意味論的に閉じることは許されないことである。父が自分の優位性を真に受けて息子に「死刑宣告」を言い渡し、息子は息子でそれを真に受けて橋から飛び降りてしまうように、この非-物語は謂わばありもしない「物語」を真に受けるという構図の上に成り立っている。そしてこの表現構造の最終的なターゲットは、われわれ読者である。読者は少なくともこのテキストの結末だけは、疑いなく真に受けてしまう。つまり、意味論的に理解したにせよ、しなかったにせよ、とにかくこの「物語」は息子の死をもって完結したのだと。これは、カフカのテキストに共通する表現形式の策略である。ゲオルクが本当に死んだのか、あるいは死んでなどいないのか、テキストはその何れも全然語っていない。つまりテキストは本来少しも完結していないのである。テキストが示すこの開かれたままの「終り」は、テキストが中断していることしか意味していない。そしてこの中断は、物語の完結を準備するものではなく、あくまで物語を分断し、解体するものである。「判決」を受けることで、むしろ出口の可能性を探るという解釈にせよ、結局息子は再オイディプス化されたのだという解釈にせよ、それは物語のない物語を完結させ、そこに新たな概念対立という物語構造を構築することを意味する。物語とは、それがいかなるものであれ、意味の固定化、価値の絶対化を指向するところに生起し、それによって、内在的価値を保障し、かつそれに支えられた共同体的構造世界を構築しようとする欲求である。つまり、構造の安定性への指向が内在しない物語は存在しない。しかるにこうした意味の固定化(物語)を拒否する読みを可能にしているのが、カフカのテキストである。つまりテキストは現前の権力構造を解体するだけでなく、均質性に保障された相対的な差異構造の中に自らを固定化する(完結する)ことを際限なく引き延ばすことで—デリダの「差延」(différance)を想起されたい—、自らの構造をも解体する—つまり自らを権力化することを回避する—、そんな可能性をカフカのテキストはわれわれに読ませるのである。そこに初めて、体系に囚われない絶対的「他者」—主体=自我(個としての主体、並びに共同体的主体)—という軛から解放されつつ個として生きる者⁽²²⁾—の可能性が生まれるのだ。カフカ自身このことを意識化していたと思わせるにたる日記の記述を、最後に引用しておこう:「立場の安定。ぼくは何か特定のやり方で、自己を展開させたくない。ぼくは他の場所へ行きたいのであり、実際それは、あの『他の星に行きたい』ということなのだ。それには自分自身のちょっとわきに立つだけで十分だし、いま立っている場所を他の場所と見なすことができれば、十分だろう。」⁽²²⁾

注

『判決』から引用した箇所は、括弧の中にそのページを示した。使用文献は“Franz Kafka/Gesammelte

Werke" (Hrg.von Max Brod)。

- (1) ロラン・バルト：『物語の構造分析』、みすず書房、1979年、87ページ。
- (2) 前掲書、86ページ。
- (3) ロラン・バルト：『文学の記号学』、みすず書房、1981年、9ページ。
- (4) 柄谷行人：『マルクスその可能性の中心』、講談社、1978年、20-21ページ。
- (5) Th. W. Adorno: "Aufzeichnung zu Kafka" in "Prismen", Frankfurt am Main, 1976, S. 305.
- (6) G. ドゥルーズ/F. ガタリ：『カフカ—マイナー文学のために—』参照、法政大学出版、1978年。二人はカフカのオイディプス的関係の倒錯性を、以下の『父への手紙』の箇所を引用することで指摘している：「第一にお前に罪のないこと、第二に私に罪のないこと、そして第三に、まったくご大層にもお前は私を赦す気であるばかりか、これはたいした違いがあるわけではないが、真実にさからって、私にも罪のないことを証明までして、それを自分でも信じようとする気である [……]」。
- (7) Adorno: S. 304.
- (8) デリダの「差延」(Différance) 参照。特に、ジャック・デリダ：『カフカ論—「掟の門前」を巡って』、朝日出版、1986年、57ページ。
- (9) ロラン・バルト：「カフカのこたえ」(『エッセ・クリティック』所収)、晶文社、1972年、188ページ。
- (10) Kafka: "Briefe an Felice", am 10. Juni 1913.
- (11) ドゥルーズ/ガタリ、特に第四章参照。
- (12) 前掲書、81-82ページ参照。
- (13) 蓮実重彦/柄谷行人：『闘争のエチカ』参照。河出書房新社、1988年。
- (14) デリダの「外部」としての「エクリチュール」参照。特に、ジャック・デリダ：『グラマトロジーについて』、第一部第二章、現代思潮社。
- (15) ドゥルーズ/ガタリ参照。
- (16) 前掲書、90ページ。
- (17) 前掲書、91ページ。
- (18) フェルディナン・ド・ソシュール：『一般言語学講義』校注、トゥリオ・デ・マウロ、前立書房、1976年、24ページ。、30-31ページ。
- (19) ロラン・バルト：『記号学の原理』(『零度のエクリチュール』所収) 参照、みすず書房、1971年、102ページ。バルトはラングとパロールの関係を、弁証法的なものと規定している。
- (20) デリダ：『カフカ論』、42ページ。
- (21) ドゥルーズ/ガタリ：64-65ページ。
- (22) ファニー・ドゥルーズ/ジル・ドゥルーズ：『情動の思考』参照、朝日出版社、1986年、特に50-52ページ。
- (23) Kafka: "Tagebücher", am 24. Jan. 1922.